

北海学園大学人文学部 開設20周年記念シンポジウム

神・人・死者―日本列島における多文化共生の伝統

グローバル化した世界における人文学

現代日本における人文学の課題―キリスト教研究の視座

哲学

人文学の 新しい可能性

史学

新人文学

パネリスト **芦名 定道氏**
(京都大学大学院文学研究科教授 キリスト教学)

佐藤 弘夫氏
(東北大学大学院文学研究科教授 日本思想史)

テレント・アイトル氏
(北海学園大学人文学部教授 比較文学)

司会 **安酸 敏眞氏**
(北海学園大学人文学部教授)

2013年5月18日(土)

14:00~17:00(開場13:30)

入場無料
・
予約不要

会場／北海学園大学 豊平校舎7号館 D30教室
地下鉄東豊線「学園前」駅下車3番出口

お問い合わせ先

北海学園大学人文学部事務室

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 TEL 011-841-1161(内線2134) FAX 011-824-7729
Eメール jinbun@jin.hokkai-s-u.ac.jp URL <http://hgu.jp>

主催：北海学園大学人文学部 共催：北海学園大学大学院文学研究科／北海学園大学人文学会





人文学の新しい可能性

20 世紀後半の「文化論的転回」(カルチュラル・ターン)以降、古典的な人文学のモデルは大きく揺らいでいます。《哲・史・文》という伝統的な三区区分そのものも見直しを迫られ、全国の大学の文学部や人文学部は組織や名称の変更を余儀なくされてきました。

科学技術と市場原理が支配する 21 世紀にあっては、そもそも人文学の学問性や有用性を疑問に付す風潮すら見うけられます。しかしわが国においては、東北大震災と福島の前例のない原発事故によって、科学技術の進歩と経済発展を最優先してきた近代人のあり方に警鐘が発せられ、人間同士の絆や連帯が見直され、地球環境との共生という謙虚な人間の生き方が模索され始めています。

ところで、人文学はすぐれて人間の生き方に関わる学問です。近代のパラダイムが揺らいでいる現代世界のなかで、はたして人文学は何を根本原理として自己再編すべきでしょうか？ 人文学にはいかなる学問的使命が託されているのでしょうか？ 人文学は現代社会に何を提言できるのでしょうか？

北海学園大学人文学部は、開設以来、「新人文主義」の理念を高く掲げてきましたが、わたしたちは混迷を深める 21 世紀の日本にあって、自分たち付託された使命と課題を明確にし、北の大地から「新人文主義」のメッセージを発信すべく、20 周年を迎えたこの機会に「人文学の可能性」を問うてみたいと思います。

現代日本における人文学の課題—キリスト教研究の視点から—

京都大学大学院文学研究科 教授 芦名 定道

人類が培ってきた伝統は、近代以降、そして現代、急速に変容し消失の危機にさらされている。宗教文化が伝承してきた死に直面しての喪の作業(葬儀など)に関わる伝統も例外ではなく、現代日本においては、伝統の再構築が求められているように思われる。

わたくしの発題においては、伝統の変容と再構築に対して人文学がいかなる意義と役割を有しているのかについて、キリスト教研究(キリスト教学)の視点から議論を行ってみたい。

神・人・死者—日本列島における多文化共生の伝統

東北大学大学院文学研究科 教授 佐藤 弘夫

過激なナショナリズムの高揚にみられるように、いま世界中で近代の矛盾が一気に噴き出している。東日本大震災もまた、現代社会のあり方を根底から問い直す出来事となった。

この発題では日本列島を素材として、古代以来の長いスパンのなかで、「世界」の構成員として人間のみが突出する近代の異形性を指摘するとともに、「新人文主義」の問題提起を受け、融和と共存の新時代構築に向けて、人文学が果たしうる可能性について考えてみたい。

グローバル化・合理化した世界における人文学—文学の役割とは何か—

北海学園大学人文学部 教授 テレングト・アイトル

人間は古来、神話と詩と物語と共に生きてきたが、近・現代人は、文学の実用的、功利的、写実的な部分だけを好んで肥大化させ、文学の豊かな部分を萎縮させて自らの内面世界(感情システム)を支えてきた。かくして高度な管理化、合理化された社会が構築できるようになったが、逆に精神が貧困化し、無感動化に蝕まれ、さらに災害・不安・苦痛などに苛まれて、現代人はありとあらゆる手段をもって精神的、感情的な「癒し」を求めている。これは先進国にほぼ一様に見られる一種の逆説的な現象だといえる。

このパラドックスに「呪われた現代人」の内面世界にとって、人文学としての文学は何を意味し、どういう役割が果たせるか、その可能性を問いかけたい。